

21. 悪性疾患における CEA 測定の臨床的意義

○今技 孟義 仙田 宏平
加藤 敏光 松浦 省三
山脇 義晴
(岐大・放)

各種疾患の CEA を RIA (One step sandwich 法) を用いて測定し 臨床的検討を 加えたので 報告した。

正常値の上限を 2.5 ng/ml とし、これ以上を異常とすると悪性腫瘍で CEA 陽性率の高い疾患は胆嚢癌 100%，転移性肝癌 70%，大腸癌 67%，胃癌 61%，肺癌 39%，脾癌と肝細胞癌 30% などであり、主に消化器系に高い傾向を認めた。最高値の症例は 69 歳女直腸腺癌肝転移例で、25.5 ng/ml であった。胃や大腸の腺癌において分化型と未分化型とにわけ CEA 値との関係を調べたが両者に有意差を認めなかった。

一方、良性疾患における CEA 陽性率は大腸ポリポージス 100%，胆石症 33%，甲状腺腺腫 20%，卵巣囊腫 20%，慢性肝炎 8% であり、その内最も高かったのは慢性肝炎（活動形）の 4.6 ng/ml であった。悪性と良性疾患の境界は 5 ng/ml にある様に思われた。胃癌 51 例中肝転移を認めた 36 例の陽性率は 72% (26 例) であり、一方、肝転移のはっきりしなかった 15 例の陽性率は 33% (5 例) であった。さらに大腸癌、脾癌でも同様の有意差を認め、CEA 値は癌の進展度と深い関係があった。また胃癌肝転移 36 例においても、肝シンチ上多発性欠損像を呈した 31 例の陽性率は 77% (24 例) であるのに対し、単発性欠損像を呈した 5 例の陽性率 40% (2 例) にすぎず、さらに大腸癌肝転移例においても 同様の有意差を認め、CEA 値は腫瘍の占有する大きさ（量）とも深い関係があった。

肝細胞癌 80 例と転移性肝癌 74 例の CEA 値と AFP 値を 同一血清にて測定し、その関係につき調べたところ、CEA 値が 8 ng/ml 以下で AFP 値が 20 ng/ml 以上の範囲内に入る 61 例中肝細胞癌が 98% (60 例) の大多数を占め、転移性肝癌はわ

ずか 2% (1 例) にすぎなかった。また CEA 値が 10 ng/ml 以上で、AFP 値も 10³ ng/ml 以上の範囲内に入る 7 例すべてが胃癌からの転移性肝癌であった。術前後の follow up 例からみて、CEA の半減期は 7 日以内にあると思われた。

22. 転移性肝癌における CEA と肝スキャンパターン

○油野 民雄 利波 紀久
久田 欣一
(金大・核医学)

転移性肝癌における血中 CEA 測定に関しては従来よりその有用性が指摘されているが、今回癌の肝転移に関し肝スキャンと血中 CEA 値と対比し、肝スキャン検出以前の血中 CEA 測定による早期の癌の肝転移検出の可能性につき検討した。

血中 CEA 値はサンドイッチ法にて測定したが、advanced stage の悪性疾患で血中 CEA 値の増加を認めた。血中 CEA 値より癌の肝転移の有無を評価するため、false positive と false negative の和が最小となる 5 ng/ml を最低陽性基準として設置したが、大腸癌、胃癌、脾癌、胆道系癌計 127 例中 5 ng/ml 以上の値を呈したのは 44 例であり、肝転移例では 34 例中の 76% で 5 ng/ml 以上の値を呈した。一方、肝転移例 45 例中肝スキャンにて明瞭な欠損を呈したのは 33 例の 73% であるが、肝スキャンと血中 CEA 値の少なくとも一方より評価可能であったのは 45 例中 41 例の 91% であった。肝スキャン欠損陰性で血中 CEA が 5 ng/ml 以上を呈した場合、真に肝転移が存在するか否かが問題となるが、肝転移陽性例では 8 例中 4 例で肝腫大所見を呈したのに対し、肝転移陰性例で肝スキャン上肝腫大所見を呈したのは 10 例中僅かに 1 例のみであった。肝スキャン上明瞭な欠損像を認めなくても、血中 CEA が高値を呈し肝腫大所見を示せば癌の肝転移の可能性大と言えよう。